

随 想

雲南旅行記

張 宇

去年の夏休み、一度帰国し、雲南省へ旅行にいきました。

雲南省は94%が山地です。雲南の上空を飛行機で飛ぶと、それがよく分かります。連なる山並には、くねくねと曲がりくねった白い糸のような道が、途切れることなく、しぶとく続いています。それを目で追ってゆくと、村や畑など、人が住んでいる場所にたどり着きます。この山並は、西北部が高く、東南部が低い、つまりヒマラヤ山脈から南シナ海に落ちている斜面の途中に位置しています。長江、メコン河、サルウィン河、ソンコイ河などの河川が深い谷を作って流れていて、盆地があちこち点在し、そこに町や村ができています、雲南とはそう言うところです。

雲南省は総人口の中で少数民族の占める割合は約三分の一です。主要な少数民族は25民族もあり、いわゆる「民族のるつぼ」です。言葉も、宗教も、服装も、歴史もちがういろんな民族が、比較的狭い範囲にいっしょに住んでいるのです。町の中で、色彩が華やかな民族衣装を着て、表情が生き生きしている若い女性の姿を見ると、楽しい気分になりました。民族衣装の華麗な色彩と気候の良さがあいまって、雲南を明るいイメージに彩っているようです。

民族ばかりではなく、静かな町と雄大な自然が調和した美しさに雲南の魅力があるのではないかと思います。

「昆明」から北に約600kmの世界遺産で誇っている「麗江」は、雲南のナシ族の生活している古い町です。家の前をきれいな水が流れる水路と、それに架かる石橋は、麗江古城に独特の風情を与えています。この静かな町を歩くと、澄んだ空気の中に、しっとり落ち着いた気分を感じました。「麗江」の見所は、なんといっても町の北側にそびえる「玉龍雪山」でしょう。「玉龍雪山」に登山した日、とても珍しく好天気に恵まれました。標高5500メートルを越える山頂からは、海のような雲が足下に流れていました。紺碧の空に、太陽の光だけが照らして、木も生えていない雪原はキラキラと輝いていました。万年雪に

囲まれていたが、全く寒さを感じなく、雄大な自然が身体を暖かく迎えてくれました。

私が本当に感動したのは、長江「虎跳峡」の旅でした。「麗江」の西北部を流れる「金沙江」（長江の上流）に一番狭い大峡谷で、「この峡谷を虎が飛び越えた」という伝説から、この名前が付けられました。峡谷の上流はものすごく深く、穏やかな川が、下流に向かうと、突然激しく流れて、濁流になり、想像を絶する世界です。しかし私たちが目にした「虎跳峡」は、上流の三分の一であり、その下流は非常に危険なので、観光コースには入っていません。しかも交通手段もホテルもなく、暴風雨の後、道も壊れてしまい、人の行けない場所だそうです。「しかし、十倍の美しさがある。以前、3人の冒険者が峡谷の中で死んでしまったが、今までにも命を捨ててもかまわないから峡谷へ行きたいと望む勇ましい人たちもたまにいる」と地元のガイドさんにそう言われて、全く想像できなかったが、ふと、重い荷物を背負って一生懸命歩いている二人の外人さんに気がきました。「あっ、本当にいるんだ」とびっくりしました。

その後、「春城」と呼ばれる「昆明」や、「横断山脈」と「洱海」に囲まれた「大理」も見ましたが、それほど感じるものはありませんでした。

日本に戻り、もう一度仕事に復帰しました。しかし、ほとんどの私費留学生と同じような生活の貧しさをすぐ感じました。ふと、「もう耐えられない」、「やめて帰ろうかな」と思うときもありましたが、せつかく日本に来て、日本の最先端をゆく設備を持つ名大病院で、こんなにすばらしい先生たちといっしょに仕事ができるとは、中国では思いも寄らなかった環境があったので、がんばらなければと割り切りました。

再び、その「虎跳峡」の道で歩いていた外国人の姿を思い浮かべました。その人たちは、確かな夢があるからこそ、どんな試練にも耐えられるのであらうと思いました。そして苦しくても、つらくても、「これは人生の勉強だ」と見直し、夢を追い求めつづけ、こつこつがんばることは、私が人生においてすべきことであると確信しています。

(名古屋大学大学院医学研究科博士課程)